西洋易知録

初編 下

特9
368
2

東京高等師範學校圖書
醍醐藏書
門 9
號 768
巻 2

西洋易知録巻之一下

譯者按ふ羅馬ハをゝ伊太利の一小部なりしが追々國勢強くなり遂ゝ伊太利を一統したり後又兵を所々ふ出し北ハ日耳曼の諸夷を拒ハ南々亜弗利加の各國を定め西ハ佛英是蘭等の國を辟き東ハ希臘小亜細亜等の國を并せこうりされハ其國縱横千萬里歐亜弗の三土ゝ跨きり漢書ふ所謂大秦國と八即ち是なり（こゝゝ羅馬の由来を看官ゝ示して才四才五二編と讀むの助々とな）

第四篇　剛士但丁、ゼグレート帝の事

要　紀元三百三十年都を剛士但知腦布

尓(ル)に徙す

此篇ハ羅馬(ロウマ)史中の至要なる一紀事なりその所以三ツ
り一に剛士但丁(コンスタンチン)帝ハ羅馬帝中の始て西教を奉ぜし人
なり二に帝ハ西羅馬をして早く衰微せしむべき新し
き政事を行へり三に帝ハ新しき都を建て羅馬國東
西の分別を固ふする根本を開ける羅馬の東西に分る
る事ハ紀元二百八十六年ジオクレチアン帝のマキシ
ミアン帝と國を兩分せるに始まり三百六十四年ハレ
ンス及びハレンチニアンの二帝相互に此國を分つに
至りて東西の分別實に固し
剛士但丁(コンスタンチン)ハ紀元三百七十四年に於てブシアなるナイ

シュスと云へる地(或ハ云くビチニア)に於て生まれり其父
ハ告悪尓(コウル)不列顛(ブレテン)是班牙(スペニア)三國を支配せし羅馬(ロウマ)の役人コ
ンスタンチュスコロルスなり其母ハヘレナとて或客
店の女なり
剛士但丁(コンスタンチン)十八歳の時母と共に離縁をられしうハ東方
の國に落魄(ラク)し家財ハ殘り少なに賣盡し僅に劒を賣ら
きるのみの身となりぬ此時むしろめてジオクレチアン
帝に仕へて兵卒となれり埃及(エジプト)及び百尓西亜(トルシア)所々の合戦
に武功を顯ハしれる程に遂に第一位の「トリビュン」官名と
なりまりて去程にジオクレチアン帝殂落(ガレリュー)
ス帝之に繼ぎて東に帝たりしに帝ハ剛士但丁(コンスタンチン)の兵卒

等ゝ甚敬愛ゝゝを見て竊ゝ之を猜み悪みゝゝ時ゝ剛士但丁の父コンスタンチュースハ西ゝ帝たりしが今ハ老衰へしゝバ頻りゝ別宮ゝ子ゝ相見ゝき情を生し遂ゝ剛士但丁を召し寄せゝれバ剛士但丁ハ夜ニコメジアを出立し陸路ゝてボーロンゝ趣き此地ゝ於て父帝ゝ見へ父子共ゝ不列顛（ブレテーン）ゝ趣きゝゝ程なく父帝ハ不列顛（ブレテーン）の約育城ゝ於て殂落しゝゝれバ兵士等剛士但丁（シスタンチン）を推して父ゝ継き西帝とゝらしむ剛士但丁則ち此事を書き認めてガレリュース帝の許ゝ言ひ贈りしゝかレリュース帝之を諾し剛士但丁を以てコンスタンチュース帝の嗣となし之ゝ謨撒羅馬帝（ゼルマ）の尊號の號を與へられども澳額士都斯（オーギュスチュス）亦羅馬帝の尊號（ゼルマ）ゝゝの號ハ之を與へぞりゝゝ剛士但丁之を怒りゝれぞも時を待つゝ如くして敢て之を爭ハぞりゝゝ時ゝ紀元三百六年なり

此歳より二年の後即ち紀元三百八年ゝ至りしゝ羅馬の帝奇異ゝも人數増して此歳遂ゝ六帝とゝりゝゝ實ゝ前後例しゝき奇事ゝゝ西ゝハマキミミアン、其子マキセンチュース、剛士但丁の三帝あり東ゝハガレリュース、リシュースマキミミンの三帝ありゝゝ初めマキミミアン帝ハ其女（ムス）ホースタを以て剛士但丁ゝ娶せ澳額士都斯（ギュス）の號を與へたり

一國ニ六帝あり爭でゝ相親しきを得ん此の如き事の長く續く能ハざるハ必然の勢なれバ六帝互ニ不和を興しゝゝて紀元三百十二年ニマキシミアン帝ハマルセールニ於て女婿剛士但丁帝の兵ニ捕へられ此地ニて密殺きられガ為ニ病を釀して殂しゝゝ是より先き剛士但丁帝ハ告悪尔ニ於て六箇年の戰爭を為し戰ニ勝ちゝゝれバ其勢ニ乘りて此歳牙白山を越へマキセンチュース帝の領内ニ攻入り直ニシザ城の下ニ至り を下し此地より進入る事又四十里チュリン城ニ於てその軍兵を諸所ニ分ち又米蘭ヘロナの二城を取り遂ニ羅馬城ニ進むべき道を得ゝゝる時ニ伊太利の方ニてハマキセンチュース帝自ら兵を率ひ羅馬城を出る事九里蹄湍と いふ地ニ出張し知伯尔河ニ背きて陣を取り剛士但丁帝の兵を迎へ多り剛士但丁帝ハ告悪尔の騎兵を以て直ニ敵の兩翼ニ備へたる騎兵の陣ニ突入し散々ニ之を破りしゝば中軍ニ備へゝる敵の歩兵ハ戰ハずして亂れ走り知伯尔河ニ陷りて死する者數千人ゝり敵方ニてハ唯プレトリアンの兵隊のみ奮ひ戰て一歩も退ゝゝ皆其所ニ於て討死しゝゝるぞ勇ましゝゝる此時マキセンチュース帝ハ知伯尔河の橋を渡りて逃げんと欲しゝゝるニ橋ハ逃ぐる軍兵を以て既ニ満ちゝれば中々

に容易くハ通行そゝ事能ハぐ帝も兵卒と共に遂に水中に陥り帝ハ甲冑の重きが為に再び上る事を得ぞ遂に溺死て果ぬ

其頃の史家の説によれば此合戦の前日天に十字の形西教門の人ハ十字形を以て之を勝の三字見もてりしうハと以て教門の徴とす并に

剛士但丁帝則ち其旗の頭に葉各斯（ユキス）Xと〆る洋字の形を附け加へしめり此文字ハ希臘（ギリシヤ）字にて基督（キリスト西教の祖）

名ハ耶穌号ハ基督と書る時その頭字にて且つ其形十字に似たれば也

剛士但丁帝ハ羅馬城に入り即日ブレトリアンの守兵を免して家に帰らしめざマキセンチュース帝のあらし時

献上と号して志ばく元老中より取上げる租税を常式の租税とふしにより〇此に於て六箇の帝今減して三箇とある然るに又マキシミン帝とリシニュース帝との間に不和興り忽ち兩帝の合戦とあるマキシミン帝のヘラクレーの戦に打負け後數月タルシュスに於て殂落しられば剛士但丁リシニュースの兩帝則ち羅馬を二分とふし剛士但丁帝ハ西を領しリシニュース帝ハ東に君ぶり時に紀元三百十三年なり

剛士但丁（コンスタンチン）帝ハ為人怜悧にして甚名利を好み情愛深き人に非ずリシニュース帝ハ為人狡猾にして詐り多く之を信じて恐るべきの人なり如此き不仁の才子相親し

む事能はざるハ必然の事なりて速に不和を釀しなり
是より先き剛士但丁帝の妹リシニース帝の後宮に入
りしなども此等の小事ハ兩帝の怒を和ぐべきに足ら
ず遂に東西の合戦となり西帝の軍シバリ（巴諾尼亜）及
びマルジア（トラース）の兩戦に東帝の軍を破りしなり
東帝ハトラースの外歐羅巴（ヨロッパ）になる其領地を盡く西帝
に與へて和睦を為しにより
是より兩帝和睦なる事殆と八年あり俄的（ゴット）颯尓麻丁（サルマチアン）兩
夷種の西羅馬に侵入きしハ此間の事なり（即ち紀元三百二十二年）
初め兩夷種ハ多腦（ダニューブ）河の北岸に於て數兵を教閲しなり
しが是に至りて遂に河を渡りてイリリキュムに攻入り

なり剛士但丁帝直に之を伐ちなるに夷兵頃らくも支
る事能はざる河を渡りて敗走す帝自ら之を追て深く其
本國に打ち入りなり
剛士但丁帝此勢に乘じ兵を轉じて東帝の領地に攻入
りアドリアノプル（即ち剛士但丁（コンスタンチノプル））に於て東帝と戦て之を破りしなり
東帝ハ則ちビザンチューム（和脳布尓）に籠り頃らく剛
士但丁帝の兵を防ぎしが剛士但丁帝の嫡長子クリス
プス小船數艘を以て敵の大船隊を攻め遂にヘレスポ
ンを取りしなり東帝ハ則ちビザンチュームに籠り
なり則ち亜細亜に退きクリソポリの高丘に於て又
西兵と戦ひ又敗北しなれば遂に西兵の為に虜にされ

き帝の後宮（剛士但丁帝の妹）流涕して兄帝に對し夫帝の命を乞ひ入れども剛士但丁帝ハ更に之を聽き入れず（テサロニカ）に於て之を殺しぬ時に紀元三百二十四年なり是に於て剛士但丁帝ハ獨り羅馬全國を掌握す帝ハ幼なる時其母に西教を學びしかば西教を好みなり然れども公に衆神教を禁ずる事なく唯之を賤しみ輕んずるのみなり西教門の寺ハ政府より金を與へて之を修復せしめ或ハ新に寺を建てしめられば遂に國中の大都會毎に立派なる西教門の寺院群り立ち殆んと古の神社と相爭ふに至れり然のみならず西教門の僧徒ハ租稅を免ぜられ日曜日ハ休日と定め又之に加るに其の後都を西教門の流行しぬる都會に徙しぬ（即ち剛士但丁知堡布尔）

此頃西教門の内に説の相違起りられば紀元三百二十五年帝自ら西教門の高僧をビテニア（アリ）に會して耶穌の神通力なりとの説を非とせし僧亜流と議論せしめ遂に之を追放しぬ然れども三年の後亜流を召返し亜力山太（アレキサンドリア）なるその本寺に居らしめぬ

九百年餘の古すりビザンチューム城のありし地を撰みて帝新しき都を立られぬ是より先き帝此地よりシニースを圍める時頻りに地形を感歎し世界の君たるべき或ハ東に出で或ハ西に出で自在に夷賊の征伐を為

すゑハきゝゑ都さるゑ如く事ゐしと只管感じて已ま
ざりき此地ハトラースの角ゑなり此角ハ南マルモサ
の海ゑ浴し北金角(ゴルデンホーン)の港ゑ隣ゐり亜細亜の地内ゑ突入
さる事凡て六百ヤルド」ゐり此角ゑ七箇の高丘なり此
丘の上ゑ都城聳立ち一日ゑ両大陸を瞰み二大中海(ムラマドシー)中海
とい陸内の海と云を望む
此都城を建るゑ費せる金ハ幾巨萬といふ事を知らず
希臘及び亜細亜よりヒジアス(古昔高名の工人)リシピュスの刻
める青銅及び大理石をあつゑ徙し其美(きく)専羅馬城ゑも
劣らざりゐ扨紀元三百三十年五月十一日新都成る
即ち名て新羅馬(コンスタンチノポル)といふ後幾程もなく又改めて剛士

但知脳布尓(ニコウプル)と名けゐり此後羅馬國二分し此都城ハ東
部の都とゐる東部ハ西部の滅る後千年の久しき間滅
ぶる事なし
剛士但丁(コンスタンチン)帝の政を為ゐ如何ゑとゐれバ一ゑハ臣下ゑ
位官を惜ず故ゑ高公・文公・貞公・隆公・大公皆貴人の尊称と称せ
らるゝ人朝廷ゑ満ちゐり二ゑハ租税を重くを但し
租税ハ大抵金を以て收めしむといへども物品を以て
せしむる事もなりゐり租税を集るハ「キリアル」といへ
る役人ゑ委任し若し不足あれバ此役人をして自らこ
れを償ふ事なしむ三ゑハ大ゑ軍制を改む政府ハ兵事ゑ關
る事なく八人の大将軍(マストルゼネラル)ゑ之と委任す昔し羅馬(ロウマ)の軍

ハ數大兵隊（六千より三千までの歩兵と四百より二百までの騎兵を以て一隊とす）に分ちしが今改めて此兵隊を小兵隊に分ち且つ俄的（ゴート）等諸夷種を用ひて兵卒とせしが是れぞ羅馬滅亡の基とぞいひ後世ぞ始て知られぬ且又兵を二様に區別して曰く階下の兵曰く境界の兵境界の兵ハ患難多くして賞金少し然るに階下の兵ハ給金多くして都下繁昌の中にあり之を以て忽ち懦弱に流れぬ

後剛士但丁帝（コンスタンチヌス）堰尔麻丁（サルマチアン）人三十萬をもてトラース及びマセドニアに住せしめ他の夷種の侵入に備へ多し

紀元三百三十七年帝ニコメデアに殂せる時に年六十四歳なりその亡骸ハ遺言に從ひ剛士但知腦布尔（コンスタンチノープル）に徙し宮中に置きしが卿相等毎朝來りて之を拜する事生けるに君の起居を問ふが如くなりし

イウセビュース等諸史家ハ此君を歎美したりといへども我も竊に思ふに此君ハ其兵を用ひるに於けるの外別に感ずべき事少し我も今其罪を舉ぐるに第一に其妻の父を殺し又已が子の武勇を悪みて之を殺せり且其行へる政事に於ても亦後來の難を釀すべき所置多し且又西教を奉ぜりといへども唯名利を貪るの託言とするのみ

第四紀間羅馬國帝即位の表

コンスタンチュース	紀元三百五年

ガレリュース	紀元	三百五年
剛士但丁ゼグレート（コンスタンチン）	仝	三百六年
剛士但丁帝獨り帝たり	仝	三百廿四年
コンスタンチン第二	仝	三百三十七年
コンスタンス		
コンスタンチュース第二		
ジュリアンゼアポステート	仝	三百六十一年
ジョヒアン	仝	三百六十三年
西羅馬國帝即位の表（是より東西を分る）		
ハレンチニアン	紀元	二百六十四年
ガラチアン	仝	三百六十七年
ハレンチニアン第二	仝	三百七十五年
オノリュース	仝	三百九十五年
東羅馬國帝即位の表		
ハレンス	紀元	三百六十四年
テオドシュース	仝	三百七十九年
アルカディュース	仝	三百九十五年

第五篇　西帝の國滅亡の事

要紀元四百十年俄的（ゴット）王アラリック羅馬（ローマ）城を侵掠す

剛士但丁（コンスタンチン）帝の三子即ち（コンスタンチン第二、コンスタンス、コンスタンチュース第二の三帝）皆殂落ージュリアンゼアポステート繼で帝位を即き

より此人ハ剛士但丁帝の從子なりしが嘗其無道を恐れて亜細亜に身を匿し其頃頻りに西教を學びしが後安典に趣きプラト氏の理學を學びしより再び衆神教に心を傾けて西教をバ打棄てしが後ジュリアン召出されて告悪尓の奉行となりしに兵卒等リュテチア（今の巴勒）に於て之を推して澳額士都斯の号を称せしめり其翌年即ち紀元三百六十一年遂に國帝となる時に年三十歳なり

ジュリアン帝の位に即くや喪へる諸神を以て再興せしめん事を欲し一心に此一事を勉めり帝自ら諷詩を作りて西教を譏り西教を奉ずる者ハ諸學校の教師たるを禁じ又西教門の寺院ハ閉門せしめり西教門の人ハ耶路撒冷（ビリムサレム）の落ちしハ耶穌の占言に符合せる事（第二篇に見あり）て再び建つべからざるを信ずるを以て益リアン帝之を朝して云く何ぞ然る事なんやとて則ち此都城を建てしめりる處幾度となく地中より火礮を吹き出ぶし大に職人を苦しめりるとぞ

紀元三百六十三年帝波斯（パルシヤ）と戰ひ矢に中りて殂落しけり西教の方に盛んなりんとする時に當りて此君の如く頑固に魔道に迷へるハ豈憐むべきの至りならずや

ハレンス及びハレンチニアンの二帝國を分つ事ハ既に上にいへるハレンス帝の東帝なりし時匈奴人（ハンス）といい

へる鼻小うして低く目凹みて黒き東夷西伯利の寒き高原より出で俄的人の國時は俄的人ハ今モルダヒア及びワルラシアの住へる地は攻寄せり是より先き此匈奴といへる夷狄ハ亜蘭といへる夷オルガ河と河との間に住めりに打勝ちしが是に至りて此夷と兵を合せて俄的の國を攻めしに俄的の酋長ハ合戦の前に殺されしかば俄的人ハ望を失ひ皆戦ふの志なく遂に羅馬に降参を乞ひにより此時羅馬の政府より子を人質とし兵器を獻ずる時ハ都て羅馬の民とせぐしと荅へりに俄的人直ちに之を兼知しられば羅馬より小船を備へて多脳河に泛べ數日の間晝夜となく俄的人を渡して此河の南此河の北ハ俄的人等諸夷の住へる地此河の南ハ羅馬の界内なり に徙らしめられど兵器を棄る事を好まず所持しる財寶盡く羅馬の役人に賄ひ稍く兵器を獻ぜざるを得ざりし時に紀元三百七十六年なり是に於てか飢えたる猛夷一百萬人手に劒を持して羅馬の境内に住へり噫危ひ哉

是より二年の後俄的の頭人フリチゼルン等謀反してトラースに攻入りアドリアノプルの近辺にてハレンス帝の兵と戦ひ大に之を破りしが帝も手疵を負ひしかば従兵等之を助けて近辺の或る小舎に舁き入れしが遂に賊の為に焼殺されけり

紀元三百七十九年ガラチアン帝初めハレンチニアン帝を継ぎ西を帝たりし君是班牙の産テオドシュースといへる者を東帝となしけるがテオドシュース帝直に俄的人を追拂ふべき事を諸士に命じ自らテスサロニカに陣し數出で〻俄的人を攻め惱ましける事四ケ年に及び遂に俄的人を境外に追拂ひられバ則ち高加索山及び黒海多腦河及び里尼河を羅馬の北界とし此内にハ決して夷族を入らしめざる事を命じ此君ハ羅馬帝の中始て真實に耶穌の聖教を奉じたる君なり且つ固く衆神教及び亜流教の説を禁じ但し此頃衆神教を奉ぜし者ハ少なからずして亜流教を奉ずる者ハ剛士但知腦布尔に甚多かりしと云ふ紀元三百九十五年此君水腫病を疾み米蘭に於て殂落しけり

初めマキシミリアン帝の時より伊太利北地にある米蘭城を西帝の居城と定められしがテオドシュース帝殂落し不肖の二兒アルカジュースオノリュースの父に継ぎて東西に帝たるや西帝オノリュースハ俄的人の酋長アラリックの侵寇を恐れて亜得亜海岸の一都城ラベンナに逃走せり此都城ハ波河の南數里にして四面に近く廣ろ〻ぎる沼澤なれバなり

羅馬を攻めし夷長のうち俄的の長アラリック匈奴の長アチラ合太尔の長ゼンセリックを剛將とし

アラリックハ維西俄的（ウイシゴット）の族（俄的の貴族）ニシテ西教ヲ奉ゼル者ヨリ紀元三百九十六年（テオドシュース帝殂落の翌年）トラースヲ出立シテ希臘（ヂリヤ）ヲ侵掠シタレバ西帝ハ舍太尓（ハンダル）産の人スチリコトイヘル者ヲ大將ニ任ジテアラリックヲ防ガシメケルニアラリックハ狡猾ナル輩ナレバ敢テ之ニ敵抗セル事ヲ為ク直ニイピリュスの國ニ退キ幾クモナク此地ニ於テ俄的の王ト称シタル此時東帝アルカヂュース又之ニ東イリキュム大將軍の号ヲ與ヘタリ紀元四百三年アラリック伊太利の北地ニ寇スオノリュース帝恐レテ米蘭（ミラン）城ヲ棄テアスチ城ニ出奔シタレバ俄的の兵之ヲ追テ既ニ此城ニ攻寄セントセシ時羅馬の大將スチリコポレンチア及ビヘロナニ於テ俄的の兵ヲ迎ヘ打チ之ヲ破リシカバ俄的人ハ伊太利ヲ去リテ五年の後ち俄的人又攻來リ羅馬城ニ攻寄セタリシガ此時ニ於テハ羅馬の勇將スチリコ既ニ西帝の為ニ殺サレシガ故ニ一人トシテ之ヲ防ぐ者ナカリケリ扨羅馬城中ニテハ飢饉疫病ニ堪ヘズ遂ニ城中ニ所有（あるところ）金銀絹布胡椒等ヲ俄的王ニ與ヘテ和ヲ乞ヒシカバ俄的王ハ之ヲ收めて多斯加納（トスカニ）ニ退きけり然ルニ西帝オノリュースハラベンナ城ニアリ城の固きニ頼リレバ俄的人ニ和ヲ入セて羅馬城ヲ安んぜるの策ヲ行ハザリシカバ俄的人ハ知伯尓（チベル）河の口ニアルオスチア城ヲ拔き又羅馬城ヲ圍

みりう城中の人俄的王アラリックの命に従ひ本地の奉行ありりるアタリュスといふる者を帝とふして和時を為しまけり後幾くもふく其人ハアラリックの為に廢せられあり扨其後ラベンナ城の近辺に於て羅馬人大に俄的人を殺きしらべ俄的人ハ怒りて遂に羅馬城に攻込み頃ハ紀元四百十年八月二十四日の夜を始めとし俄的人等人を殺し家を掠め亂妨狼藉する事凡て六日の後財寶金銀を車に積みて羅馬城を去りアピアン街道より南方に進み速に伊太利の南地を平定しりり俄的王アラリック勝に乘て悉西利に趣らんと欲しけるがいまだ至らずしてカラブリアふるコセンザに於て死

しまりり従兵等一河を堰きりて其死骸を河底に葬り又其水を舊の如くふらしめ死骸を埋めたる人夫ハ盡く之を殺しまり是きアラリックの死骸を埋めたる地を人に知らしめざらんが為めなりとぞ

此時に於て西羅馬の大國將に各國に分裂きんとす紀元第五紀の始めに於て既に三箇の新國生ぎり其一ハ不列顛にして此國ハ既に羅馬人の管轄を脱せり其二ハ是班牙にして此國ハ既に隋窩亜蘭含太尓三部の人の為めに平定きられまりり其三ハ告悪尓にして俄的不尓給農佛郎哥三部の人の為に據られりりアラリックの妻の兄弟アドルフといへる者西帝オノリュースの妹を

妻とせしが帝の為め兵を率て是班牙の賊を征伐し
けるが此人ハバロセロナ城に於て殺されぬ
亜弗利加の地さまゝ夷狄の為に據らる初め羅馬の大
将ボニペース西帝ハレンチニアン第三（オノレース帝に繼ぐ）に
背き含太尔人（ゴンダルス）を是班牙（スペニヤ）より此地に迎へけり含太尔王
ゼンセリック是班牙の船に乘り海峽を渡りて亜弗利加
の地に到り平原に於て兵を閱するに其數五萬人ありし
含太尔人ハ勿論亜蘭俄的（アラニヤ　ゴット）の諸夷も亦軍中にありけり
亜弗利加の色黑き土人等始めにハ此白面の夷を恐れ
しが遂にハ追々其軍勢に加はりけり且又「ドナチス」
宗門の徒ハ羅馬政府の制禁に苦しみしゆゑ皆悦んで

ゼンセリックに降參しけり亜弗利加の地タンヂールよ
りトリポリに至るまで殘る處なく此夷の為に亂妨せ
られしかゞ此地の腴へる麦田盡く荒れ果てぬ羅
馬城中の人ハ最も其麦を得て生活しりるあれば是事
羅馬國の為にハ最大の事件なるべし此期に及びポニ
ペースハ頗る其身の誤まりを後悔し羅馬國の為に賊
を追拂ふん事を欲しくもどる今更せんもなく紀元
四百三十一年に於て此人ハ其籠りし海岸の一城なる
ヒポレジュース（今のボナ）を賊に焼られ遂に此地を捨てゝ伊
太利に趣き仇アエチュースと戦ひ兵敗れて殺されぬ
扨亜弗利加の地に於てハ紀元四百三十九年加尔太額（カルタゴ）

城ゼンセリックより降りられバ亜弗利加の住民等皆伊太利或ハ東帝の國より逃れをけり

爰より又匈奴の酋長よアチラといへる才智鋭き者なり其顔凶悪にして其丈け低く〳〵且肥へ〳〵り此人五十萬の夷を以て匈牙利の地を出て天下を平呑をべき勢を奮ひ西ハ里尼河北ハ波羅的海東ハ裏海の外より至るまで其威を懼をぞといふ事なかりり紀元四百四十六年より於てアチラ剛士但知脳布尓城より逼りしより東帝テオドシュース第二之を恐れて恥づべき盟を為して和睦を乞ひけり扨匈奴王之を諾して其國より歸りより一年或ハ云く二年の後東帝使節を其方へ遣しける時法

なくも此使節よアチラを刺をべき内命を與へしろ密策露顯しなりりされどもアチラハ使節を殺ずして盛んなる之を饗應して朝り辱めしとぞ

紀元四百五十年アチラ西東兩帝より不遜の書を贈りて云くアチラ汝等より命ぜ汝等我が為より宮室を作り我を迎へて饗應をべしと此時の東帝ハマルシアン帝といつる君なりしがアチラの方より重て租金を拂ふべき旨いひ越しける時東帝之より答へて我ハ朋友よのみ金を與へん事を好む敵よハ唯劔の鋼を喫ましめんと欲をるのみといひて決して租金を拂ハざりり然るに匈奴王ハ弱きより始むる事上策をるんとて則ち西帝

の國ゑ攻入る是より先き西帝ハレンチニアンの妹ゑ
オノリアといへる女剛士但知腦布尔ゑ追ひ放された
りしが長歸參を許されぎりしうバ遂ゑ癲狂とあり匈
奴王ゑ脂環を贈りて妾を妻とす妾が身を自由とふ
して玉ゑれうしといひ使しけるが是ゑ至りて匈奴王
之を託言とす西帝の許ゑ使を遣し我妻の采地と
て西帝の國の半を借り受けたき由をいひ贈りしが西
帝の弱といへどもの言をバ許諾きぎりしうバ匈奴
王ハ匈奴の兵とつのアて里尼河を渡り告悪尔の中國
ゑ攻入り遂ゑオルレアンス城ゑ攻寄せきりしうバ城
中一同ゑ恐きを懐きしが此時幸ゑ羅馬の救將アエチ

ース俄的の酋長テオドリックと兵を合せて城近く到着
そアチラハ之を聞き直ゑシャロンズの原ゑ退き此地
ゑ於て二國の兵を迎へて大ゑ合戦きしが遂ゑ二國の
兵の為めゑ破られぎり時ゑ紀元四百五十一年ぎり匈
奴王アチラハ告悪尔の軍ゑ打負きりしうバ則ち兵を
轉じて牙白山を越へ伊太利ゑ攻入り直ゑアキレア等
諸城を落し又米蘭巴費亜両城を掠め將ゑ羅馬城の方
へ進まんとしける時羅馬の教公レオといへるう西帝
の命を奉じて其軍中ゑ到り彼をが所望の地若しくハ
其地の代料を與ふべき旨いひきりしゑアチラハ此僧
の威儀ゑ感じ且つハ其兵の伊太利の風俗ゑ習ひて柔

弱とあるりしを知り其上アエタースの兵法に巧みなるを恐れしかば遂に和睦を許して匈牙利に歸りしが程なくまた死しにより時に紀元四百五十三年なりアチラ常に誇りて我馬の蹄める所一根の草も生長せぞといひり其死するや其國内は亂れ別れ外は烏拉山の夷ユグリアバルス二部の人の為めに攻掠められ遂に滅亡に及びしとぞ

初めアチラの羅馬城に攻寄んと欲しりる時舍太尔人の王ゼンセリックはアチラと同盟を結びしかばアトラス山の木を伐りて多く軍船を造りこれに乗りて地中海に泛び悉西利を攻取り然のみならず數伊太利の海岸

を掠めり紀元四百五十五年マキシミュスといへる人帝位を簒しイウドキシアといへる先帝の妃を強ひて後宮とせしけるが妃は甚之に得堪へず如何にもして此苦しみを免れんと欲し遂にゼンセリックを頼みられバゼンセリックは乞に應じて知伯尔河の口に碇泊しオスチア城より羅馬城に攻寄せり此時教公レオ先年アチラを説きて退かしめし事ありしかば此度も亦此の如くせんと欲し僧徒を率ひてゼンセリックを迎へこれを説きしかりもどゼンセリックは更に其言を兼諾せず其兵をひて遂に羅馬城に攻入り十四日の間これを亂妨しけり其有様は實に言葉に述べがたく青銅製の物

品ハ皆之を鎔し古名人の作りたる家屋碑塔等ハ皆散々ゝ之をくづきけりそれより含太尓(カルタゴ)人ハ財寶俘虜を船ゝ積込み一同ゝ加尓太額(カルタゴ)城へと歸りけり

其明年より十六年の間四百五十六年より四百七十二年ゝいたるレシメル

といへる夷種の一卒羅馬の政權を握り此間ゝ四帝を廢立したりより四帝のうち最初ゝ帝位ゝ即きたるマジヨリアン帝といへるハ稅賦を輕くし仁政を行ひしゆゑ滅亡すべき羅馬を此君ゝよりて再興するゆゑんとて國民互ゝ賀しけるが惜ひかな此君ハ紀元四百六十一年ゝ殂し之ゝ繼(ツギ)し三箇帝ハ皆論ずるゝ足らざる暗君なりしゆゑ羅馬國ハ益衰微し民皆望を失ひより

紀元四百七十二年レシメル羅馬城を掠め後四十日ふして死しより レシメルの死して後帝位を踐みたる天子三人ゝして尾りの帝を羅慕路澳額士都斯帝(ロミュリュスオーギュスチュス)といへるも此君ハ容貌麗しきのみゝて外ゝ才能のなる事なかりしゆゑ俄的の一種へルリ人の酋長オドアセル伊太利の兵卒を以て帝をうべんか城ゝ圍み容易く之を下し六千片の口粮金を與へて之をミセニュム(リュキュリュス)村ゝ放ち則ち自ら伊太利王と称しゆゑ羅馬の元老等西帝の冠衣を包みて剛士但知腦布尓ゝ贈りけり是ゝ於て西帝の國滅亡を時ゝ紀元四百七十六年なり

人之を論して國を東西ゝ分ちしより此災を引出せり

といふ者多し予れ思ふに是も恐らくは然らじ是も此國は廣大に過るを以て之を守るに力及ばず且つ奢侈の悪風より上下人民の柔弱に流れし故なるべし内此の如くなる上に境界も亦固からざりし國なれば爭で長く北方猛夷の侵冦に耐へ得んや

オノリュース帝以後西羅馬國帝即位の表

オノリュース		
ハレンチニアン第三	紀元	四百二十五年
マキシミュス	仝	四百五十五年
アビチュス	仝	四百五十六年
マジョリアン	仝	四百五十七年
リビュセベリュース	仝	四百六十一年
アンテミュース	仝	四百六十七年
オリビュース	仝	四百七十二年
グリセリュース	仝	四百七十三年
ジュリュース子ポス	仝	四百七十四年
羅慕路澳額士都斯（ロミュリスオーギュスツス）當于此君之時羅馬國滅	仝	四百七十五年

第六篇　羅馬城の風俗を述ぶ

羅馬の家の作り方は大概重立たる間を樓下に作れり客は玄關より歩廊を傳ひて本屋に入るなり玄關は屋根なく兩側に功徳多き神像を並べ置けり家多くは本屋の入口の敷居は大理石を以て之を作

う其石ニ「サルフ」萬福とソフ語を刻めり入口の内ニ戸
者坐ー其側ニ犬若ーくハ犬の画を懸けり客ハ此
入口ニ入りて廣き客堂ニ至る此間と両側の間とも
あいだニハ圓柱並びて立ちり客堂ニハ先祖代々
の像を置き又「ラル」といへる神を祭るニ火を焼く爐
あり客堂の中央若くハ居室の中央ニ水缸を置きて
屋根の穴より下る所の雨水を受けるけり客堂の後
ヘニ又「ペリスチール」といへる廣き間あり會食所及
び寢室の如き小なる間ハ主人の好みと都合ニ從ひ
一様ニならず牀ハ板を以てたりなる家希ニハあ
きども太抵ハ有色の大理石或ハ瓦又ハ玻璃を以て

なりなるもの多ー壁ハ太古の質素なる時代ニ於て
ハ漆食を以て白く塗りたるのみなりしが中古ニ至
りて壁ニ彫みヌハ画きりり或ハ價貴き鏡を懸け
家々あり天井ハ「チュッコ」未詳といへる貴き土を
以て之を塗り之れニ金を拌ぜ且つ之を五色ニ染め
たり窓の障子ハ黄雲母或ハ玻璃を用ひたり屋根の
上ニ花園あり花の美しき葉の緑りなる事專平地と
異ならざりき
此の如き上等の家ニハ紫金二色の蒲團を備へたる
象牙の寢床并ニ貴き木を以て作れる卓子あり又金
銀の小卓子を置き其上ニ金銀虎珀の器コリンチア

ン青銅の盃亜力山太製の玻璃器を並べり此器の美しき事ハ「オバル」「ルビー」きゝ石の名なる美しゝ劣らざりしとゝふ

家内の用事ハ各種の奴僕なりて之を辨ずる昔しハ數人の僕ありて足まりとしたりしが中古ニ至りてハ人皆一僕をもて二事を兼ねしむるを恥ぢりと思ひて許多の奴僕を買ひ置き會計を掌る者倉庫を掌る者寢室の事を世話する者庖厨の事を世話する者の外ニ又主人の肩輿を舁く者なり或ハ主人の他行する時其供を務むる者あり是れよりも又更ニ奢まる家にてハ醫者祐筆及び學者を買ひ又ハ遊樂の

為ニ樂人戲子幇間を買ひ或ハ特更ニ愚なる奴僕を買求めて之を遊樂の相手とする也奴僕此の如く許多ありといへども必ず二種奴僕の外ニ出でず二種とハ一ハ新ニ買ひたる奴僕二ハ譜代の奴僕是れなり其頃奴僕の市ありて通常の奴僕ハ此處にて賣買する事獸畜を賣るとの一般なりといへども美しき女ハ又ハ藝ある奴僕なれバ市ニ於て賣る事なく賣者買人と共ニ酒店ニ入りて約束を定め之を賣買しりり奴僕の價ハ四「ポンドステルリング」より八百「ポンドステルリング」までの相違あり

羅馬人衣服の中にて最奇なるハ「トガ」といふる物ふ

して純白の羊毛を以て織りたる其貌輪を半切したるが如き奇服ふり中古より至りては往来まて之を着する事すくれ「バリューム」又「ラセル」といふ糸色したる厚布を以て作りたる外套流行したりしが儀式の時又ハ尚「トガ」を用ひけり且又戯場まて天子の幸臨ありし時ハ見物の人皆「トガ」を着せざる事を得ざりしり中古以来の羅馬帝ハ「ブラクセ」といふる弛き股引を穿ちそを踝の辺まて縛り付けたり此きハ北狄の風習の推し徙りしなり羅馬人ハ平生帽子を冠る事なし但し旅行する時又ハ間行する時又ハ黒き帽子を冠りしり皆ハ家又ある時之を穿つ事なく「ソレ」とくるるものを素足又巻きしのみなりしとへども他行する時ハ今の皆又似たる「カルセウ」とつるるものを履きしり高位の羅馬人ハ盡く左手の無名指（金指と名づくる印璽ある指環を穿ちけり伊達者ハ指毎又玉の環を穿ちし故又或伊達者冬の指環ハ重くして夏ハ用ひずして別又夏の指環を作らしめ夏と冬とを區別し置きしといふをりしき話なり

羅馬婦人の服三つあり一ハ「インフルチュック」下着二ハ「ストラ」三ハ「バルラ」是れなり「ストラ」とハ貴き女の着する袖短き服すして胴中まて帯を結び裾を厚くして足の甲又至らしむ「バルラ」ハ艶ある色の外套ふ

して他に出る時着する物多く尤中に八空色の外套に星の如く金を撒きしるを着せ女子たりと雖も艶なる色のみ流行しなれば羅馬の婦人の集會に談赤、紅、黄、紫色、嫩緑、あんどを打混ぜしるいと奇麗なる會なるべしなるべん頭上には玫瑰を簪し金の針を以て髪の毛をとめ頸と腕とに金及び真珠を飾りけり其頃流行せし腕環に金の蛇にてその眼に「ピー」石を入れしめたり

羅馬の衰微せし時代の人に甘き物を多食するより外他事を務めざる人多く且つ亜細亜と交際をしけるより酒をも飲み習ひ羅馬人八日に食ふ事三

度にして朝八麺包乾蒲萄或ハ橄欖乾酪牛乳雞卵を食ひ昼八魚類雞卵及び前夜の晩膳に食ひ餘りたる物を食ひ且つ酒をも少しく飲めり晩膳八夜第九時頃にして今の大餐の如きものなり此時八雞卵魚類及び大根蒿苣の如き單薄なる野菜に甘き烹汁をうけたるなり食ひ初めしを食ひし後食ふ物品八種々なるを以て一様に述べがたし先つ魚類にてハ比目魚、鱈魚、鰡魚を好み鳥類にてハ孔雀、雉、鷸鴫「ヒグペッケル」鳥名未詳を好み獸肉にてハ少かき家豬の肉又ハ鹿肉を好めり此諸品を食ひ了りし後煎餅菓實を食べり會食する時羅馬人八低き杌子に依る杌子を三方に

並らべ中央を尊位とあ〳〵一方ハ空位ゑ〳〵て侍僕の皿鉢を置き徒すゑ便りよかゑ〳〵めゑ〳〵其後圓き卓子の流行りゑる時代ゑ至り半圓の机子行りをりり其頃卓子ゑ布を掛りゑる事なく又小刀及ひ肉又を用ゑる事ふく二本の匕を用ひりり其一本ハ小ゑ〳〵て柄尖ゑり一本ハ大ゑ〳〵て其貌いまゞ詳ならゞ羅馬人の酒宴ハ上ゑいつゑる如くなれバ其立派ゑ〳〵ハ疑ひふ〳〵とつゝどゑ惜むべし燭蠟ゑり〳〵を以て燈器ハ美なれども油滴てて卓子を汚すのみならゞ天井四壁ハ更なり客の美服まで油煙の付ゞるを得ざりゑり

酒宴の時客皆「トガ」を着きず赤色或ハ其他艶ゑる色の短き服を着〳〵りり酒ハ蒲萄酒を用ひ又「ミュルセム」酒とて蒲萄酒ゑ温湯と香料を入ゑる物を飲りり

羅馬人ハ浴堂ゑ遊ぶ事を好み日ゑ七八度ゑ湯ゑ入りゑりり且つ浴堂ハ都下の人々其日の風説を語り合ふ所ゑてぞなりりゑる

羅馬人ハ皆僕を多く買ひ置くを以て旅行するゑ奢りを極る事を得ゑり好む所の乗物ハ木の肩輿ゑて革の暖簾を掛け乗る人ハ其中ゑ寝轉びりり羅馬人ハ又馬車をゑ用ひ且つ借〳〵車屋ゑあり郷舎ゑハ

りゝり貴き旅人ハ大抵朋友の家ニ宿するを以て旅店ありけれども賤しき者のみなるハ宿しけ都下ニて戯場戯馬等各種の遊樂を施行しりり其中ニてもいと恐ろしうしハ真劔の試合ありしを為ニ者ハ俘虜奴隷或ハ罪人ニして喇叭の響きを相圖とし東西より出て相戰ひしが為ニ死する者多りき又獸と人と狄鬪ハしもる事もありけり

羅馬の書冊ハ「パルチメント」羊皮ニて作まる紙の卷物ニして文字ハ油煙を蘆葦ニ附けて書きたるもり紙の裏ハ泊夫藍を塗りたる多し紙の上下ハよく擦りて黑く塗り卷物の軸ハ象牙を附け又ハ塗金したり

羅馬ニて貴き人の死しりる時ハ其葬送を盛んニしけ吹手唄女幇間をして皆黑き服を着して棺車の前ニ立ちて行列をしあ棺車を「ホリュー」ム議事官の會する所ニ舁き入れ之を下ろして死者ニ數言の偈を受けしめそれより棺車を舁き上げて葬地ニ趣く事を禮とせ

西洋易知録巻之一下終

巻之一附記

○第一世聞人の姓氏

リフィー　紀元前五十九年パヒアに生る○紀元十七年死す○多く羅馬府に住む○高名の史家にして紀元前九年までの羅馬國史を著す凡て百四十二冊此書今僅に三十五冊を傳ふ

オヒット　紀元前四十三年シルモに生る○詩人にして其著ハもるメタモルホセスといへる書ハ人の善く知る所なり○紀元八年澳額士都斯帝に放たれ同十八年トミ（黒海の辺にあり）に於て死す

ベルシュース　紀元三十四年イトリュリアに生る○著す

所謂詞六篇前曲一篇あり○年三十ヨリして死す

セネカ　紀元前數月コルドバヨリ生る○理學ヨリ長ぜ○子ロ帝ヨリ仕へ後帝之ヨリ自殺せしむ○著を所謂理論綱鑑尺牘あり或人云く又悲哀の曲十篇を著せり

ルカン　紀元三十八年コルドバヨリ生る○其著す所今僅ヨリハルセリア」といへる詩一篇を傳ふ○セネカの如く子ロ帝ヨリ謀反せる罪ヨリ自殺を命ぜらるけり時ヨリ紀元六十五年なり

プリニー㊁　紀元二十三年生る○高名の博物家なり○嘗て是班牙の刺史なり○紀元七十九年ベスウヴィウス火山の出し時死せり

プリニー㊀　紀元六十二年又六十三年コミュンヨリ生る○タシチュスと相善し○ビチニアの知縣なり○著す所尺牘狀とトラジヤン帝の誦文なり

キンチリアン　是班牙の北地ヨリ生しなり○羅馬府ヨリ於て論理學を教授す○論理學大全を著す

タシチュス　子ロ帝の時生る○高名の史家なり○アグリコラの女を娶り舅の傳を著せり○又澳額士都斯帝殂落より子ロ帝殂落までの羅馬史を著す○又日耳曼國史を著す

シュートニュース　子ロ帝の時生れしなり○歴史の著述多し然し今唯十二諡撒の傳のみを傳ふ

ジュベナル　紀元四十年頃に生る○諷詩に巧みなり○其著せる諷詩は老年に至るまで秘して世に出さざりし○其傳世に傳らず

ガレン　紀元百三十一年ペルガミュムに生る○高名の解剖家にして醫書の著述多し○亜力山太(アレキサンドリア)に於て醫術を學び羅馬(ローマ)にて之を施せり○其著す所今百三十七部を傳ふ

テルチリアン　紀元百六十年加尔太額(カルタゴ)に生る二百二十年に死す○西教の經典を述るに始て拉丁(ラテン)語を用ひたる人なり○紀元百九十八年頃に西教の正しき事を論ずる書を著せり

オリゼン　百八十五年又百八十六年埃及(エジプト)に生る○嘗て亜力山太(アレキサンドリア)に於て假りに問答を設けて諸學科を教授せり○西教經典を上梓し且つ其講義を著せり○年六十九の時チイルに死せりと云傳ふ

シプリアン　紀元第三紀の中頃に於て加尔太額の門ルチビップ僧官の名たり○二百五十八年ハレリアン帝に殺さる○耶穌教門の本基といへる書を著ハせり

アンブロース　三百四十年の頃告悪尔(ドウル)に生る○米蘭(ミラン)の「アルチビップ」たり○甚く亜流(アリュース)の説を悪めり○著す所「オヒシス」といへる書あり○三百九十七

年ゝ死す

イウセビュースパムヒリュス　二百六十四年の頃巴列斯（パレス）丁ゝ生る○セーレアの「ビップ」僧官の名（アレース）より○亜流の説を信ぎり○著す所教門の事を加へ述べたる萬國歴史并ゝ剛士但丁帝の傳あり○三百三十八年死す

アタナシュース　第三紀の尾り頃亜力山太ゝ生る○三百二十八年此地の「パトリアルク」僧官の名（アレクサンドリア）と為ゝ官位を召上げられて路の教門ゝ従ハぎるが為ゝ追放をられり

グレゴリーナジアンゼン　第四紀の始めカパドシア（カパドキア）ゝ生る○嘗て其父なるナジアンゼスの「ビップ」を輔佐せり○後剛士但知脳布尓（コンスタンチノプル）の「パトリアルク」となる○其著す所教門ゝ關係ーなる詩文多ー

クリソストム　三百五十四年アルチオック（アンチオキア）ゝ生る○三百九十七年剛士但知脳布尓の「パトリアルク」となる○其著す所第四第五兩紀間の風俗を述べたる書なり

ゼロームム　三百四十年ダルマチアゝ生る○猶太（ユデヤ）語ゝ長ぜ○「モナスチシスム」家を棄て世の塵埃ゝ係らぎる事を始めたる人なり○西教の經典を拉丁（ラテン）語ゝ譯す○亦經典の講義耶蘇高弟等の傳を著す○

四百二十年ヨ死す　三ミヂアヨ生る○ヒポ
オーギュスチン　三百五十四年
の「ビソップ」ヿ○論理術を教授する事なり○ペラ
ジュースと爭ひ競ひ一人あり其著す所耶蘇の功德
記及び耶蘇の降生前八人の凶惡あり一說あり又
自己の傳を著し書名を懺悔錄と云ふ○四百三十
年ヨ死す

第一世の紀事の表

耶蘇生る	紀元前一年
チベリュース帝位ヨ即く	紀元十四年
耶蘇磔せらる	二十九年
アンチオックヨ於て耶蘇教門の徒始て「キリスチアン」と号す	四十年
クラウヂュース帝不列顛を攻む	四十三年
羅馬城ヨ於て西教の徒を殺す（※）	六十四年
耶路撒冷滅ぶ	七十年
アグリコラ不列顛を支配す	七十八年
羅馬城并ヨシーリアヨ於て西教の徒	九十五年

を殺す㊁	
トラジャン帝ダシアン人ヨ勝つ	百三年
ビチニアヨ於て西教の徒を殺す㊂	百十年
小亜細亜ヨ於て西教の徒を殺す㊃	百十八年
再び耶路撒冷を建てエーリアカヒト	百三十七年
リアと名く	
スミルナヨ於て西教の徒を殺す㊄	百六十七年
リカルプ殺さる	
祿恩ヨ於て西教の徒を殺す㊅	百七十七年
埃及ヨ於て西教の徒を殺す㊆	二百二年
セウェリュス帝約育ヨ於て殂す	二百十一年

小亜細亜ヨ於て又西教の徒を殺す㊇	二百三十六年
羅馬城并ヨプロヘンスヨ於て西教の	二百五十年
徒を殺す㊈	
羅馬城并ヨ亜弗利加ヨ於て西教の徒	二百五十八年
を殺す㊉	
サホルアンチオックを取る	二百六十一年
オーレリアン帝ゼノビアを破りパル	二百七十三年
ミーラを取る	
ジオクレチアン帝マキシミアン帝と	二百八十六年
羅馬を分ツ	
不列顛羅馬ヨ叛きて獨立す紀元三百年ヨ至り	二百八十八年

又羅馬ヨ滅さる

ニコメヂアを初めとして所々ヨ於て西教の徒を殺す㊤　三百三年

剛士組丁帝即位す　三百六年

羅馬國六つヨ分る　三百八年

剛士但丁帝羅馬國を一統す　三百二十四年

西教の高僧ニセーアヨ會す㊥始　三百二十五年

剛士但知腦布尔城成る　三百三十年

ハレンス帝ハレンチニアン帝と羅馬を分つ　三百六十四年

徴的人トラースヨ居住す　三百七十六年

西教の高僧剛士但知腦布尔ヨ會す㊥再　三百八十一年

衆神教を禁ず　三百九十四年

アルカヂュース東帝となりオノリュース西帝と成る　三百九十五年

アラリック羅馬城を掠む　四百十年

羅馬人不列顛を引き拂ふ　仝

佛郎哥王ハラモンド立つ　四百十八年

西教の高僧イヘシュスヨ會す㊢　四百三十一年

含太尔人加尔太額を取る　四百三十九年

アングル人サキソン人ジュート人の三不列顛を攻む　四百四十九年

西教の高僧カルセドンに會す㊃	四百五十一年	
羅馬人滅的人と兵を合せて匈奴人と大ふカロンふ戰ふ	全	
含太尓人羅馬城を掠む	四百五十五年	
西羅馬滅ぶ（オクチュムの役より是以て至りて凡て五百七箇年羅馬の始原より是に至りて凡千二百二十九箇年なり）	四百七十九年	